

Title	八幡宮の研究(宮地直一著, 理想社刊)
Sub Title	
Author	佐志, 傳(Sashi, Tsutae)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.1 (1957. 7) ,p.127- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570700-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

頃尾崎浦の庄屋吉田九右衛門が「あんかう」と稱する拾貳石積小船五拾艘を拵へ、京都堀川筋の通船を江戸表に出願し、この結果は文書では不明であるが面白い。この外に参考となり、又興味を覺える文書が多數であるので、浦方研究者に必讀をすゝめる。終りに著者の度重なる足勞筆勞に對して深甚の敬意を表し、三村研究の大成を待望する。

(武田勝藏)

八幡宮の研究

(宮地直一著
理想社刊)

昭和三十一年十二月發行、A5判、三二九頁

一

我が國における神祇史の考證的研究は伴信友をもつて嚆矢とするが、彼にあつては史料の不足という點において聊か難點があり、明治時代における栗田寛の研究は、極めて該博なる知識をもつてなされた斬新な學說ではあつたが、なお史料の検討という點において多少疑問を起さしめるところがあつた。しかるにこれら二先學を超え、科學的な考證のもとに多くの史料を驅使して、精緻なる研究を發表した第三の碩學は、實に故宮地直一博士であつた。戦前における神祇史の研究は、博士を中心として順調にすすめられていたが、終戦を期として不當な壓力を蒙り、その成果を十二分に發表出來ない様な状態にたちいたつていたが、十餘年を経

た今日、漸く新研究が發表される様になつたことは、いかにも喜ばしい限りである。

この時宮地直一先生遺著刊行會より遺稿集第一卷として、著者の學位請求論文たる「熊野三山の史的 연구」が昭和二十九年十月國民信仰研究所より刊行され、今又遺稿集第二卷として「八幡宮の研究」が昨年十二月理想社より刊行されたことはまことに意義あることである。

二

さて本書には八幡宮關係の論文六篇がおさめられ、第一の「八幡信仰の起源並びに發達」は、博士が京都大學における神道講座の昭和十三年度の講義案よりの抜抄である。第二の「八幡宮の研究」は博士が明治四十一年七月東京帝國大學文科大學史學科における卒業論文であり、上は八幡神の出現より下は室町時代にいたるまでの八幡信仰の變遷を五篇二十四章六十六節に分つて詳述した大論文である。このうち第四篇第一章「源氏と八幡宮との關係」のみは補正されて、翌年史學雜誌第二十編に「清和源氏と八幡宮との關係」と改題して連載せられ、更に改訂されて「神祇史の研究」(大正十三年)に、その上に又改訂されて「神道論攷」第一卷(昭和十七年)に収録されている。第三の論文「東大寺八幡宮の鎮座について」は寧樂第八號に昭和二年六月發表したものであり、第四の「鶴岡八幡宮領に於ける分社の一例」は昭和三年一月國學院

雜誌第三十四卷第一號に發表したものである。第五の「六條新八幡宮の性質」は大正十一年九月、十月に歴史と地理第十卷第三、第四號に掲載され、のち論をひろめて「室町幕府の崇祀」と題し「神祇史の研究」、及び「神道論攷」第一卷に載せられたものであり、第六の「八幡造略説」は明治四十四年一月神社協會雜誌第十年第一號に掲載せられたものである。

三

まず「八幡信仰の起源並びに發達」についてのべれば、本稿は本書に掲載された諸論稿のうちで年代的に最も新しく、博士の圓熟した學識をもつて記述されたものであるだけに、本書のうちで最も重要な論稿といえる。即ち八幡信仰の本質的な究明をはかり、八幡神の示現より論をおこし、八幡信仰の中央進出にいたる過程を、豊富なる學識と嚴正なる考證とをもつて論述している。特に注目すべき點は、八幡信仰の原始形態と祭神論であろうと思われるから、この兩面を中心に本稿を紹介しよう。「序説」において八幡信仰の特異性を、一、八幡神が「國家的靈驗の發揮を本來の使命」とする國家神的性格である點より道鏡事件、文永・弘安の役における八幡神の役割を考察し、「當代の人々の宗教生活の指導原理」となつたことを擧げ、次いで、二、眞言、禪、日蓮宗等の佛教と密接なる關係を有し、早くから佛教との交流を計つたところより「佛教擁護神」として、上は宮中より下は庶民階級に至る

僧俗を合せる凡ゆる階層に滲透した點を指摘し、以上の如き二つの特異なる性格は確かに八幡信仰の敷衍發達する原因ではあるが、八幡信仰の八幡信仰たる所以は「原始神道の信仰の一形態が永く後世まで保留」されていたことに存するのであると述べている。即ち「靈媒たる御子(神女)の存在を要件として、それを通して起る託宣を信仰することにあるのであつて、この様な信仰は他に例のみられない譯ではないが、その威力は遠く八幡信仰に及ばないものであつたとしている。この様な見解が八幡信仰の根元についての博士の解釋であり、次いで「八幡信仰の由來(原始期の状態)」を考古學、民俗學の領域を取り入れて論述している。博士の説を要約すれば次の如くである。

一、八幡信仰の根元は宇佐八幡宮であり、宇佐八幡の原始信仰形態は宇佐宮東南に位置する馬城峯にみられる様な神道に固有の巨石崇拜であり、この信仰形態は彦山、阿蘇にもみられる如くかなり廣範なものであつて、宇佐は北九州におけるその一つの中心點であつたこと。

二、二次的形態として神道における御子信仰の風習が九州にもみられ、それが宇佐に取り入れられて在來の巨石崇拜と混じて大いに宇佐信仰を傳播せしめ、神子としての巫女の存在が大きく浮き出されてきたこと。

三、次に御子信仰の一形式として應神天皇を神、神功皇后を神母

とする型が三韓征伐に關係深い九州に起り、宇佐は從來の御子信仰にこの思想をいちはやく取り入れて、應神崇拜を本位とする御子信仰となつたこと。

以上が八幡信仰、特に宇佐八幡信仰の由來についての著者の説であるが、次の「八幡信仰の勃興」においては右の様な原始形態の内部に奈良朝以前より地方的佛教の一形式が宇佐に流入して、この兩宗教思想の融合がなされていた事實に着目し、更に宇佐が奈良朝に至つて九州の藤原氏と結托したことによつて地方的な發達をとげていたと指摘している。その後八幡神が養老四年の隼人族の反亂並びに天平期の大佛鑄造事件を契機として、神佛習合という基礎に立つ國家神として、俄かに中央に進出した事實を述べ、その間における禰宜尼杜女、主神司田麻呂の活躍を、政治、思想兩方面における定着性を缺いた、奈良時代という時勢の内に捉えて説明している。

第四の「八幡信仰の全盛」においては道鏡事件を取り擧げて、續紀神護景雲三年條と、後紀延曆十八年二月條の清麻呂傳との間の記述の差異より託宣の降下に際しての形式上の手續きの問題に注目し、その際、審神者が必要であつたのは、人間の理智の觀念の進歩というよりは、裡面に隠された政治的壓力の存在を豫想し、それは宇佐八幡内部における分裂とその兩派の消長が直接中央政府の権力と結び付いて政治面に現われ、神託の本來の純粹な面目

を失うに至つたと述べている。

最後の「石清水八幡宮の鎮座」においては石清水八幡宮の鎮座にまつわる緣起が正史たる三代實錄に載せないところより疑問を起し、貞觀元年宇佐八幡を石清水に勧請するに至つた經過を極めて批判的に考察している、即ち紀氏出身の奈良大安寺の一修行僧が「單なる私の目論見」で勧請したのではなく、平安奠都によつてその神威が不本意ながら政界から遠ざかつていた時、たま／＼齊衡二年東大寺大佛の佛頭が墜落し、そのために朝廷では宇佐へ使を遣わし神助を乞う様な事件が勃發した。この好機をのがさず八幡の神威を新京平安の都にも發揮しようとする意志が、宇佐八幡信奉者の間に働いていたのであつて、石清水宮鎮座はたゞ單に宗教的問題として取扱わるべきものではないと論じている。

以上を綜合すれば八幡信仰の原始形態は巨石崇拜であつて、それに應神天皇、神功皇后を御子、神母とする御子信仰が附加されて特異なる祭祀形式をとつてきた。その様な特異性と共に佛教とも習合した一土地神であつたのが、政治的事件を契機として中央政局に進出し、平安遷都後は石清水八幡宮の鎮座をみるに至つて、伊勢神宮に次ぐ國家の第二の宗廟として仰がれる位置に昇進したと述べるのである。この様な見解は今日でも未だ聞かない考察であり、八幡信仰研究の面ばかりでなく、我が國古代史の解明という點においても劃期的論考と考えても過言ではないであらう。

四

次に本書の主要論稿であり、又書名ともなっている第二部の「八幡宮の研究」について述べる。本稿は既述の如く明治四十一年における博士の卒業論文であり、その當時本稿は學位論文としても何ら遜色のないものであるとさえ評價され、學界は擧げてその公表を期待したが、その内容の點で當時の神道界に及ぼす影響を懸念し、更にその後も博士は神道に對する自由な研究發表をなすには余りにも責任ある立場にあつたため、今日まで他の多くの研究と共に筐底に深く藏せられて世に現われなかつたのであるが、その極く一部である「源氏と八幡宮との關係」が翌年史學雜誌に發表せられた時、斯學において新機軸をなす論文としてその續載が期待されたほど好評を博したと傳え聞いている。要するに明治四十一年當時において、本稿は學界を瞠目せしめるに足る論考であり、その學問的價値は計り知れないものであつたが、右の様な理由により半世紀も發表されず、博士の歿後漸く刊行されるに至つたため、今日では既にその平安期における石清水の活動や、鎌倉・室町兩期における武家の崇敬の状態はその後の諸學により或る程度まで明らかにされていく様な状態であるから、今回はこれらの點についての紹介を割愛し、その紹介は特記すべきものだけに止める。

まず前稿で割愛された八幡という名稱の由來及びその祭神につ

いての記述を紹介しよう。古くから「八幡」という名義の由來には定見がなく、佛教思想よりくる八正道によるとするもの、託宣による八王子よりくるとするもの、地名よりくるもの等の諸説があり、今日でも學界の研究課題となつている問題である。この點に關して本稿は八幡地名説をとつてゐる。ところが博士も斷つてゐる様に古來より宇佐地方に「八幡」という地名のあつたことを聞かないし、たとえ他地方において地名に由來する神名があつたとしても、八幡という地名のないところからその地名を冠した土地神、八幡神が祀られる様になつたという説にはどうしても賛同出来ない。やはり八幡の名義は對馬等に見られる朝鮮の影響をも考慮に入れて検討すべきものと思う。

次に祭神の問題であるが、本稿を公表されなかつた理由の一斑は、此項にあるのではないかと推測される様な大膽な論證で、本稿中でも出色の一項であろう。即ち八幡神は本來應神天皇ではなかつたことを斷言している。明治四十一年當時は栗田寛の八幡神彦火火出見命、比咩神豐玉姬説が横行しており、世の學者こぞつて栗田説に左袒する時に際して、著者が一人昂然と自説を提唱したことは特筆さるべきであろう。この八幡神と共に第二神である比咩神に關する議論は最も紛々たるもので、大別して玉依姬とする説、宗像三女神とする説、應神天皇と關係ある伯母或は后神とする説の三説があり、史書にもたゞ比咩神とのみ載せて、八幡神

の如く應神天皇と擬定することは全く見えない。そのため江戸時代より色々説が分れてきたのであるが、博士は第三説の立場をとっている。即ち八幡神をいかなる神としても比咩神はその后神であるとし、その例證として春日、枚岡、平野の諸社における比咩神は何れもその主神の後神である點を擧げてゐる。この様な他社との比較検討は他に類例をみない卓見であると考えられる。

以上明治四十一年の本稿と昭和十三年の前稿との論旨を比較検討してみると、本稿で取扱つた祭神の問題はそのまゝ採用されているが、八幡信仰の原始形態に關する項は全く新に加筆せられたものであり、八幡信仰の根源的信仰形態の解明は本書で最も價値ある項である。たゞこゝに希望をのべるならば、八幡祭神が八幡信仰の原始形態たる巨石崇拜、御子信仰とどの様な關聯をもつて關係づけられ、又八幡宮内部での祀官の派閥と女禰宜や奉祀祭神の關係も言及されていたならば、より完全なものになつたであらうと推察される。

その他本稿で特色のあるのは各時代毎にその時代の神道思想の概観であり、何れも一讀の價値ある項で中世における石清水八幡宮の別當、神人の活動や、持明院、大覺寺兩統の迭立の際における託宣の内容等非常に興味深い記述がある。

五

以上が「八幡宮の研究」における特筆さるべき點の極く一部分

を紹介したのであるが、綜合して考えてみると、八幡宮のみを取り挙げて論考した専門書は一冊も世に現れなかつた現在、本書は最も廣範で信憑性のある八幡信仰の専門書であり、當時のオーソドックス神祇史學の典型として神祇史研究上の大いなる業績であると共に、後進にとつても有益なる刺戟となつて今後八幡宮研究が發展するものと信じて疑わない。大方に一讀をお奨めする所以である。

(一九五七・五・二〇 佐志 傳)

人文地理學

(西岡秀雄著
櫻書院刊)

本書は大學生向の入門書乃至講義の副讀本として『大學教養講座』シリーズの一部として刊行されたものであるが、その特徴とする所は従來この種の概説書がともすれば經濟地理、集落地理、人口地理等に於ける分布論を中心として説かれる傾向が顯著であつたのに對し、これ迄大きく採り上げられることの少なかつた生活地理、文化地理(氏の分類による)を中心としてとり上げてゐる點にある。中でも生活地理の一部門として自然的災害に大きく目を向けられてゐるのはその方面に對する人文地理學側からの分析説明が強く要請されてゐる際であるだけに、特に注目に値しよう。この自然的災害は戦後の日本再建の鍵を握るとも云われる國土綜合開發計畫の進展を年々大きく阻害して來たものであり、そ